伏

〔日本書紀三神武〕戊午年、是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎、蹈山啓行、乃尋烏所向、仰視而追之、遂達于菟田下縣、

〔今昔物語二十八〕忠輔中納言付異名語第廿二

今昔、中納言藤原ノ忠輔ト云フ人有ケリ、此ノ人常ニ仰デ空ヲ見ル樣ニテノミ有ケレバ、世ノ人此レヲ仰ギ中納言トゾ付タリケル、

〔源氏物語十三明石〕いとゞぼけられて、ひるは日ひとひいをのみねくらし、夜はすぐすかにおきゐて、ずゞの行へもしらずなりにけりとて、手ををしすりて、あふぎゐたり、

〔長門本平家物語十六〕畠山少しもたゆまず渡りて行く、〇宇治河、中略、ふりあふのいてうしろをみれば、

〔倭訓栞前編二十三乃〕のけざま　竹取物語に見ゆ、仰樣の義成べし、のけにたふるゝなどいへり、

〔類聚名物考言語十七〕のけざま　仰樣

あふのけざまともいふは、俗にのけにそるといふに同じ、

〔竹取物語〕中納言〇中略籠に入て釣られ登りて、うかゞひ給へるに、〇中略我物にぎりたり、今はおろしてよ、おきな、しえたりとの給ひて、あつまりて、とくおろさんとて綱を引すぐしてつなたゆるときに、やしまのかなへのうへに、のけざまにおち給へり、

〔大鏡六内大臣道隆〕御賀茂詣日は、社頭にて三度の御かはらけ、空にてまいらするわざなるを、その〇藤原道隆御時には禰宜神主も心えて、大かはらけをぞまいらせしに、三度はさらなる事にて、七八度などめして、上社にまいり給ふ道にては、やがてのけざまにしりのかたを御まくらにて、不覺におほとのごもりぬ、

〔類聚名義抄一人〕俛音免フス〇ツフス〇　俯俛フシアフク上音府フス フシトコロ　伏音服フス ウツフス

〔書言字考節用集九言辭〕伏フス　俯同　俛同